

□■[表紙の続き]「夕鶴」の授業から…□■

教科学習といってもたくさんの教科がありますから、それぞれいくつかの教科を分担して研究しました。私は文系ですから国語の分野を担当することになり、文学作品や評論文、説明文、それに文法など学習指導要領で「言語事項」と言われることからの学習活動の実践プランをつくって、授業をしてもらって、その過程を観察し、分析して、プランの有効性や改善点を明らかにする、といったことをやってきました。

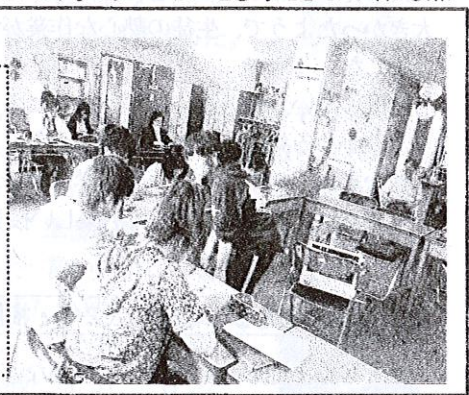
そういった研究活動の中で、多くの国語の授業を観察して、いい授業のもっとも大事な要素は、いい教材をえらぶことだ、とくに教師が、好きな作品、惚れ込むような作品を選んでやる授業は、いい授業になる、ということがわかってきました。「夕鶴」という戯曲は木下順二という作家が、佐渡の民話を素材にして「鶴女房」という作品を1943年頃(第二次世界大戦中)に書き、それをさらに戦後、昭和24(1949)年に書き直して「夕鶴」として発表し、「ぶどうの会」という劇団によって、この年の10月に関西で公演され、以後、東京初め各地で上演、約40年間にわたり1037回上演という記録が残っている作品です。この「ぶどうの会」の上演を、私は学生時代に見る機会があり、「つう」を演じた山本安英という女優の演技に感銘を受け、その後、教科書教材にもなり、いつかこの戯曲を子どもたちと一緒に読みたいと思いながら現在まで機会がなかったのが、今回、思い切って取り上げてみたわけです。

これは、たんに美しい文学作品として鑑賞するということには取り扱いたくはない、いろいろ考えさせられる点を多く持っていてそれらをじっくり皆で考えて見たいと思っている作品です。例えば、この中で出てくる人間関係や事件を、今の世の中に移し変えて考えるとどうなるだろうか、といったことがあります。たとえば惣どは大企業、運ずは下請けの中小企業、与ひょうやつうはさらに孫請けの零細企業の働き手としてみると、どう考えられるか。いわば、一番下っ端の働かせられる人間は、家庭を持っていても、会社の都合で、家族から離れての単身赴任を強いられ、家族がばらばらにされてしまう、などといったことが生じています。このような事態と「夕鶴」の悲劇を重ねて考えてみることもできるかもしれません。そのような人間を人間としてではなく、単に会社の利益を上げるための一部品のように扱う関係への批判の観点を汲み取ることもできるかもしれません。それで中小企業家同友会の文書「円卓」など、いまの経済関係のなかで人間的なあり方を追求している

考えがあることを取り上げたのでした。

また、この作品の与ひょうとつうの関係やこの二人と子どもたちとの関係は、夫婦のあり方にとって、あるいは大人と子どものあり方にとって、なにか示唆する点はないか、問題として考えさせられる点はないか、と考えることもできそうです。将来、あなた方も結婚されて家庭を持つでしょう。そこで夫婦の間で、お互いを他の人に言う場合、「主人」と「家内」といったことばが使われている現状は、夫婦のあり方が平等な関係と言うよりは依然として上下関係的なものを含んでいることを示しているのではないのでしょうか。夫婦間で、無理なことを夫が言ったらどうするか、などということも、現実の生活ではよく生じます。こういったことも考えさせてくれる点です。

◆大学生授業、星座の名前の由来…自分の星座を考えよう



ちょっと授業でも話しましたが、竹内敏晴という方は、「ぶどうの会」の「夕鶴」上演の演出を担当した岡倉士朗に師事してその演出助手などをやった方ですが、与ひょうとつうのやり取りで、つうが与ひょうのことばをわからなくなる場面を取り上げ、「布を織れ。織らんと、おら、出ていってしまう」という与ひょうのことばは、商人に教え込まれた「方便としてのことば」で、それをつうが100%まことと受けとってしまう「悲惨さ」を指摘しています。(『癒える力』晶文社、1999、p16)ことばが通じない、解らない、といった事態、またわかったつもりで本当はわかっていない場合など、ことばに関しての問題を多くとりだすこともできそうです。方言と共通語の問題もあります。

また、あなた方は将来、教師となり子ども達と接する機会が多く出てくるでしょう。そのとき、子ども達と一緒に遊ぶことがうまくなるか、どうか。子どもと同じような気分、気持ちをもてるかどうか、どうすれば子ども達になつかれるのか、など、考えてみることも、この戯曲を読んでできることでしょう。

皆さんにいろいろと沢山書いていただいたので、それらをじっくり読ませてもらい、なんとかまとめて道民教に発表したいと思っています。(2013.6.21、下線は編集子)